OISHI. Manabu (editional supervisor), Tokyo Gakugei University Research Society on History of Pre-Modern Japan (ed.), Capital City Edo and Kaga Domain: From Edo to Regions, From Regions to Edo

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00052772

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大石学監修・東京学芸大学近世史研究会編『首都江戸と加賀藩 ―江戸から地域へ・地域から江戸へ―』

上田長生

一、本書の構成

二〇一五年は、加賀藩研究の注目すべき論集が相次いで刊行されたが、本書、大石学監修・東京学芸大学近世史研究会編『首都江戸と加賀藩―江戸から地域へ・地域から江戸へ―』もその一冊である。本書は、二〇〇八年から二〇一三年までの東京学芸大学近世史研究会の共同研究・調査の成果である。活動記録からは、掲載論文の執筆者以外にも多くの参加者があったことが分かり、それ自体現在の近世史研究が取り得る一つの方向性・モデルを示していると考えられるが、ここでは、基本的に本書の内容に即して論評することにしたい。まず構成を左に示す。

はしがき　大石　学
序章　「首都江戸と藩」研究　桐生海正・關谷和也・長代　大
第二章　参勤交代を支える人々 ―享保期の参勤交代を事例に―　守屋龍馬
第三章　江戸出訴をめぐる加賀藩と江戸 ―享保期鹿磯・黒島海境一件―　長代　大
第四章　近世白山麓における材木の生産と流通　桐生海正
第五章　加賀藩における法要の様態について ―高徳院二百回忌法要を中心に―　關谷和也
第六章　加賀藩礼法師範渡辺家に関する一考察　深町佐和子
第七章　藩領民の江戸流入と藩邸 ―加賀藩政後期における走百姓問題から―　小嶋　圭
第八章　明倫堂の学制改革 ―加賀藩士による上申書から―　北澤亮介
第九章　加賀へもたらされた西洋砲術の伝達過程に関する一考察

—陪臣河野久太郎宛の書状の分析を通じて—　小柳はる香
第一〇章　幕末の海防政策における軍事動員
—江戸湾防備と加賀藩—　杉山　綾
特　論　「江戸育ち」「江戸好き」の藩主たち
—江戸・国元関係の視座転換—　大石　学
活動記録
あとがき　桐生海正・關谷和也・長代　大

全体の感想として、多くの新しい事実を教えられ、加賀藩研究の重要性を改めて認識させられた。特に、手薄であった加賀藩と江戸の関わりを正面から検討したことは特筆されよう。修士課程在籍者や卒業生・修了生が中心の執筆者によって、これだけの大著がまとめられたことは、率直に言って驚きであるし、評価されるべき点であろう。しかし、一冊の書物としては、読みやすいものとはいえなかった。それは、引用の必要があまり感じられない史料まで膨大な引用がなされ、各章が五〇頁前後の長大さであるにもかかわらず、史料分析の不十分な箇所が散見されることに加え、文書の誤読かと思われるものから単純な入力ミスまで誤字・脱字が数多くみられたためである。この書評を監修者・編者から依頼され、本書をどのように評すべきか考えをめぐらせたが、問題点は問題点として指摘することが学問的に正しいあり方と考え、以下ではあえて厳しい意見もぶつけることにしたい。

二、各章の内容と論評

「はしがき」では、監修者の大石学氏が、本書の研究史上の位置づけと研究視角、調査・研究方法の特徴を簡潔に述べている。

序章は「「首都江戸と藩」研究」と題して、藩研究史が整理され、二〇〇〇年代以降の岡山藩研究会による「藩世界」論、尾張藩社会研究会による「尾張藩社会」研究、高野信治氏の「藩領社会」論、渡辺尚志氏を中心とする「藩地域」論については、それぞれの内容と寄せられた批判を詳細に検討している。とりわけ、江戸との関わりがどのように描かれているかに注目して批判を加えた上で、「「首都江戸」と藩」という本書の視角が導かれている。こうした本書の視角や藩世界論・藩社会論との関わりについては、三で述べたい。

第二章「参勤交代を支える人々—享保期の参勤交代を事

例に―」では、藩士がどのように参勤交代に関わったのか、その実施過程が検討されている。まず、加賀藩の参勤交代の概要を確認した上で、享保四年（一七一九）の前田綱紀の帰国を分析する。同年は寒冷であったため、老年の綱紀には帰国が難儀であると使番兼歩頭青地礼幹が進言し、綱紀正室や世子吉徳夫妻らも動くことで延期が実現したという。進言者の青地は、この功をもって帰国の供を申し付けられた可能性が指摘される。さらに、『大野木克寛日記』の検討も踏まえて、参勤交代に随行することで得られる藩士自身の利益が存在したとする。江戸と藩の関係を考える上で、参勤交代は最も基本的かつ重要な問題である。しかも、加賀藩の参勤交代については、忠田敏男氏の仕事(1)以後、具体的な藩士の関わりなどで明らかにされていない点が多い。そうした意味で、本書の課題に迫る上で適切な対象ということができるだろう。ただし、青地の事例は一般化しうるものだろうか。「参勤交代の運営」（四一頁）の全体について、基本的な事実関係を把握した上での位置づけが必要ではなかったか。また、参勤交代と江戸勤番に関する藩士の意識や実態については、岩淵令治氏の研究(2)などを参照することで、より深めることができたのではないだろうか。

第三章「江戸出訴をめぐる加賀藩と江戸―享保期鹿磯・黒島海境一件―」は、享保六年の加賀藩領鹿磯村と幕領黒島村の海境争論を取り上げ、なぜ評定所出訴に至ったのか、加賀藩側の裁判活動が誰に支えられていたのかを解明しようとする。まず、争論の前提状況と争論までの経過が確認される。争論は、享保三年の流鯨騒動をきっかけに起こり、加賀藩郡奉行・改作奉行と幕府代官の間で内談が行われるものの、決裂して評定所に持ち込まれた。訴訟の争点は、延宝三年（一六七五）に定められた境目の証文の有効性で、それが失われているとする黒島村側が敗訴し、翌年の能登幕領の加賀藩預所化につながるという。興味深いのは、江戸に赴いた鹿磯村百姓が当初は藩邸内に置かれていたものが、幕府勘定奉行の指示を受けて、加賀藩出入りの御用商人伊勢屋に旅宿を変更されたこと、さらに伊勢屋が連絡を取り次ぎ、裁判方針の協議に関わったとする点である。こうした御用を担った存在の重要性が指摘されて久しいが(3)、享保段階の例として貴重である。しかし、伊勢屋の「一定の裁量」（八三頁）がいかなる場面のものか、より掘り下げた分析がほしかった。また、伊勢屋の元来の業種も気になるところである。なお、加賀藩と幕府代官との内談で、代官が勘定奉行の相談を経ずに手鎖もできないと述べたこ

とをもって代官の裁量の限界を指摘しているが、代官の権限などはそれ自体として検証する必要があろう。ここから導かれる、「幕府代官が自らの権力では強制的に支配を完結できず、統治のほとんどを江戸の勘定奉行に確認しなければ成り立たない当時の社会的状況」（八九頁）といった評価も、俄には首肯しがたい。

第四章「近世白山麓における材木の生産と流通」は、旧来、焼畑や養蚕が知られていた白山麓幕領について、主に大庄屋山岸十郎右衛門家文書を用い、材木の生産・流通構造の解明を試みる。木呂商売は天和期以降確認でき、村内の狭い範囲での商いは一旦衰えるものの、元文～延享期には金沢などの商人を金元として展開するようになり、炭・漆実・鍬なども加賀藩領に販売されたという。また、江戸への「御用木」輸送構想も存在したが、実現しなかったとされ、延享期以降は史料上、木呂商売が見えなくなり、乗物棒・板木・柱等の生産に変わっていったとされる。木呂や乗物棒などの生業の展開過程とともに、村民が幕府の御林を無益と見るようになった点や、明和期から加賀藩市場への乗物棒・板木などの搬出時に藩改所へ通行願を提出する必要が生じたことの指摘なども興味深い。しかしながら、挙げられた史料に限っても、その背後へのさらなる踏み込みが可能ではなかったか。白山麓一八か村は、幕末期に至ってもほとんどが村高五〇石未満ながら、いずれも三〇～六〇軒余りを擁し、四〇石弱の牛首村にいたっては五三六軒を数える（九七頁）。ここからは、材木生産や炭・薪などの燃料生産に加え、焼畑などの諸生業を複合的に営む「豊かな」村を予想させる。しかし、村々の生業構造が問われていないため、当該地域における材木生産・流通が占めるウェートやその変容を十分把握できていないのではないか。なぜ、金沢などの商人が次々と金元となるのかといった点とも関連してこよう。

第五章「加賀藩における法要の様態について―高徳院二百回忌法要を中心に―」は、未解明な点の多い加賀藩における年忌法要と江戸菩提寺との関係を検討し、具体例として寛政一〇年（一七九八）の高徳院二〇〇回忌を分析する。まず、藩主とその夫人・世嗣・庶子、徳川将軍の法要、さらに江戸の三つの菩提寺が確認される。利家二〇〇回忌では年寄が法事惣奉行を命じられ、江戸では家老中心に準備が進められたこと、法要における藩主家一族・分家諸藩・藩士や前田家と関係する由緒を持つ諸家の動向が紹介される。本章は、加賀藩における藩主家の年忌法要に関する基礎的研究として有益で、江戸の広徳寺が二〇〇回忌法要を

機に利益を引き出そうとする動き、法要での拝礼や香奠献備を望む諸家・藩士の意識なども注目されるところである。欲を言うならば、利家に限っても、一〇〇・一五〇・二五〇回忌との比較検討がなされれば、解明された事実の意味付けが深められたものと思われる。筆者自身が言及する岸本覚氏をはじめ、藩祖顕彰・由緒論の先行研究が注目する一八世紀末の事例であれば、なおさらである。

第六章「加賀藩礼法師範渡辺家に関する一考察」では、加賀藩礼法師範渡辺家三代の活動や江戸での交流が、日記・書簡などから検討される。将軍家礼法師範小笠原平兵衛家への渡辺家の入門・修学に対しては、加賀藩も支援を行っており、将軍家採用＝正式の礼法伝授の場として江戸が意識されていたとする。渡辺家が学んだ成果は、筆写された書物などを通じた藩への伝播、藩校経武館での騎射指導、一三代藩主斉泰と将軍家斉息女溶姫の婚礼の「御式礼法方主附」就任などの形で具現化されたという。また、小笠原平兵衛を介した江戸での渡辺家と他藩の者との交流が明らかにされる。武家の礼法という、近世史研究では手薄な分野に切り込み、藩外との関係や藩内への伝播の検討を目指した点は評価されよう。ただ、藩内への伝播の過程や具体的な変容はほとんど言及されていない。これは、渡辺家の史料の分析のみでは捉えられないものだろう。そもそも大名家の礼法とは、江戸のそれを一方的に学び、継受するのみのものだったのだろうか。筆者は、将軍家の礼法を「正式のもの」とする。そうした意識が存在した可能性はあるが、一方で、近世大名家がそれぞれに無視できない政治文化の質的差異を持ったことも否定できない。江戸の礼法を継受することで藩内礼法はいかに変化したのか（しなかったのか）という点まで踏み込むことで、近世武家社会の理解もさらに深化したものと考えられる。

第七章「藩領民の江戸流入と藩邸―加賀藩政後期における走百姓問題から―」は、民衆の江戸流入について、人々をひきつける「首都江戸」の視点から検討する。まず、江戸への領民の移動に対する藩の姿勢を確認した上で、日用人足や参勤交代への随行など、筆者がいう「公的な移動」の諸相が、近世初期から幕末期まで幅広く取り上げられている。その上で、加越能文庫「毎日帳抜書」の分析から、没落農以外にも合法的な移動、つまり「稼」として江戸に流入し、期限を超えても帰国しない者が現れ、耕作者不足から藩内で問題化していくという。これに対して、改作奉行は江戸藩邸と連携し、国元への帰還を促したが、かかる領民保護機能によって、江戸・他国で行き詰まった領民が

むしろ藩邸に向かうことになったという。こうした本章への疑問として、参勤交代などに関わる「公的な移動」と走百姓の問題を同レベルの問題として扱って良いものかという点が挙げられる。筆者は、参勤交代などで「都市江戸の文化や風儀がこうした一部の藩領民に蓄積されていったのではないか」と両者を結び付けているが、果たしてそうだろうか。「江戸の魅力」（二六五頁）とは一体何であろうか。たとえ都市に魅力を感じた者であっても、みな江戸に向かったわけではなく、上方への流入も含めた検討が必要であろう。そもそも地方の人々は、どのように江戸（文化）を理解し、認識していたのか。著しい進歩をみせた近年の近世文化史などから学ぶべき点は多かろう。また、些末な点ながら、江戸や他国から藩邸に向かった領民の多くが、作事方御門を目指したのは何故だろうか。本章が取り組んだ課題を深めるならば、武家奉公人が「縁のネットワーク」を頼って存在したという森下徹氏の議論[4]などと接続することも可能だろう。

第八章「明倫堂の学制改革―加賀藩士による上申書から―」は、藩校明倫堂における天保期の修補（学制改革）時の、助教大島桃年の上申書（『日本教育史資料』所収）の検討を通して、藩校教育への藩士の意識を探っている。寛政四年の藩校創設を概観した上で、学校への藩士子弟の出席状況が芳しくなく、出席が督励されたこと、藩主斉泰も若年時にたびたび聴聞したことが述べられる。大島の意見書からは、自身が学んだ昌平黌の例を加賀藩にも導入しようとしたことなどが指摘される。全体として、個々の史料は極めて興味深く、本格的な読み直しが期待されることが理解できたが、本章では深い分析はなされていなかった。なお、第一節で、藩校創設時に新井白蛾を学頭に迎えることに関する藩内の議論について、儒学を中心とするか否かが争点となったとするが、これは誤りである。「加賀藩において、儒学は「陰陽師」と同様のものと認識する者も多」（三四五頁）く、「儒学を中心にするか否か」（三一三頁）が争点となったのではなく、問題は白蛾が易学を重視した点の是非である。儒学そのものが「現実味のないもの」（同）と捉えられていたわけではない。こうした解釈の上に、「加賀藩では、なじみの薄い儒学」（三一五頁）といった評価が導かれることも理解しがたい。また、三二八頁で年始講書に関する上申書から「「江戸御学問所之儀礼に従ひ」白鹿洞に掲示するべきである」と読み取っているが、［史料17］中の「白鹿洞掲示」は、朱子が『論語』『中庸』などから引用して作成し、白鹿洞書院に掲げたもので、日本全国の藩校

で広く講義された「白鹿洞書院掲示」(5)を指す。これを講書すべきと上申しているのである。

第九章「加賀へもたらされた西洋砲術の伝達過程に関する一考察―陪臣河野久太郎宛の書状の分析を通じて―」は、年寄長連弘の家臣河野久太郎が江戸や、諸方から江戸を経由して受信した書状を分析することで、加賀藩に西洋砲術がもたらされた過程を検討する。河野は、江戸詰藩士岡田条之助を介して、幕府天文方や田原藩士、さらにそこから全国に広がるネットワークを持ち、書状のやりとりを通して西洋砲術の知識や異国船情報を得ていた。藩内では石黒信之などへ入手した書籍を貸し出すなど、情報を伝えていたという。本章では、江戸を介したネットワークが指摘されており興味深いが、個々の書状の内容への踏み込みの点では物足りなさを感じた。河野文庫の史料の豊かさは、すでに一九世紀加賀藩「技術文化」研究会によるまとまった成果(6)があることからも明らかである。筆者は、ネットワークや情報の伝達過程の解明に主眼をおいているが、ふんだんに用いられた書状が有する内容の豊かさの方が印象に残ってしまう。例えば、岡田から河野に宛てた書状［史料2］には、河野が送った火薬が附頭中を通じて「差上」られ、打順次第書が「御覧」に入れられたと記されている。筆者はこの箇所に言及していないが、はたして「差上」られた相手は誰か。世嗣慶寧ではないのか。個々の書状の精緻な読解によって、伝達過程や情報・技術の広まり・受容もさらによく描くことができたと思われる。また、伝達された情報や物品・書物について、その内容・質に今少しこだわった分析もほしかった。

第一〇章「幕末の海防政策における軍事動員―江戸湾防備と加賀藩」では、主として『加賀藩史料』を用いて、幕末期の江戸湾防備における加賀藩の人・物の動きから「首都江戸」と国元の関係を問うている。最初に江戸湾防備の展開過程を押さえた上で、天保一四年（一八四三）以降の臨時の場合における人・武具類の動員準備の様相が述べられる。さらに、嘉永六年（一八五三）のペリー来航時には領内防備が固められ、江戸への人数の増派が行われたという。その後、加賀藩は品川御殿山を固場とされるものの、芝増上寺に変更され、出張体制が整えられていくとする。本章は、江戸湾警衛における加賀藩の役割や聞番の動きなど、興味をひかれる事実が紹介されている。ただ、［史料22］について老中が藩主斉泰を「呼び立て」（四一六頁）たとするが、これは聞番に渡された老中書付に記された宛名にすぎず、斉泰に直接伝達されたわけではない。［史料23］も

同様である。また、［史料24］の「廟議」は文脈からして、「朝廷の評議」（四一八頁）ではなく、幕府内の評議であろう。

最後に、監修者大石氏による特論として「「江戸育ち」「江戸好き」の藩主たち―江戸・国元関係の視座転換」が据えられている。荻生徂徠・室鳩巣らの言説を引きつつ、諸大名が次第に「江戸育ち」で、江戸を好むようになったことと、江戸の重要性は藩士にとっても同じであったことを述べて、「首都江戸」を中心に近世国家・社会を見る重要性が強調されている。

三、本書を通読して

最初に記した通り、かかる大著が、修士課程在籍者や学部・修士を出て教員として活躍する若い世代が主体となってまとめられたことは、ひとえに大石氏の指導の力強さと、共同研究参加者の熱意によるもので、深い羨望の念を持った。全国的にみても、これほどたくさんの院生・学生が精力的に近世史研究に取り組んでいる大学はそう多くはない。人文学の存立する余地が日々狭まっている今日、こうした共同研究のあり方は、歴史学を引き継いでいく上で一つのモデルともなる貴重なものと評価できよう。

ただし、繰り返しになるが、本書には多くの問題が見受けられた。まず、何よりも文書読解の誤りと誤字・脱字・誤変換の多さを指摘しなければならない。活字史料である『加賀藩史料』からの引用ですら誤記が散見された。改めて言うまでもなく、史料の正確な読解こそが、歴史学の最も基本的な要件である。多くの史料を読み解いた労は多としなければならないが、ほぼ全ての論文に多くの誤字がみられたことは、残念の一言に尽きるし、史料解釈への疑義の念を強くさせてしまう。また、行論で利用される史料はほとんど引用されていたように見受けられたが、必ずしも引用する必要のないと感じられる史料も多かった。各論文への論評でも指摘したように、史料内容の要約以上の分析が行われていない章が多かったが、長い不要の引用よりも、肝となる史料の深い分析が行われるべきだっただろう。

最後に、研究史への向き合い方と「「首都江戸」と藩」という視角について述べておきたい。序章では、先行する「藩世界」論・「藩社会」論などに対して、「なぜその個別藩なのか、その藩を研究する積極的意義付けは何なのか、いささか説明が不十分に感じる」（一六頁）との批判がなされているが、それはそのまま本書にも投げ返される言葉ではあ

るまいか。残念ながら、本書からは加賀藩を取り上げる「積極的意義付け」はなかなか読み取れなかった。また、「首都江戸」という視点には、政治・行政の中枢機能、「権力」と「権力」との折衝の場という狭義の江戸像ではなく、経済的、文化的要素等をも考慮した多角的・多彩」（一七頁）さを含意しているという。しかし、本書では、学問・文化はまだしも、経済的な関係がどれほど取り上げられていただろうか。しかも、参勤交代や江戸出訴、江戸での法要、江戸藩邸への流入などであればまだしも、「首都江戸」との関わりが薄いか、やや強引な関連づけがなされている章もみられた。江戸への白山麓材木の輸送計画以上には言及がなされていない第四章、主に学問・文化の摂取先として江戸が取り上げられている第六章・第八章・第九章である。特に後者については、江戸が次第に学問・文化の中心となり、全国にそれが波及していったことは、「首都江戸」を掲げずとも、これまでの数多の文化史・思想史研究などがつとに描き出してきたところである。個々の章では、そうした膨大な先行研究にも向き合ってほしかった。ともあれ、本書を通読しても、序章で掲げられた「藩制の統治機構や藩領域・その周辺地域において、江戸の首都性がどのように諸地域・諸集団に波及していたのか」（二七頁）は、十分には理解できなかった。近世の藩であれば当然想定しうる江戸との関係以上のものが、あまり述べられていなかったからである。

最後に、かかる本書をもって、これまでに様々な対象から幕藩関係や江戸藩邸の分析を行い、政治的・経済的・文化的な江戸との関係を明らかにしてきた「尾張藩社会」研究の成果に対して、「欠片の如き江戸像に過ぎ」（二〇頁）ないといった批判をするのはやや言い過ぎではあるまいか。そもそも、元来の出発点や当面の目標を、江戸と藩の関係においていない先行諸研究に対して、「江戸からの視点の欠如」（同）という点から批判したとしても、相手の研究者（グループ）には応えようもないだろう。

正直に言って、本書評を書くことに逡巡を繰り返したが、結局は縷々批判を書き連ねることとなった。監修者をはじめ、執筆者の方々には、愚意をお汲み取りいただければと思う。

注

（1）忠田敏男『参勤交代道中記―加賀藩史料を読む―』（平凡社、一九九三年）、同『加賀百万石と中山道の旅』（新人物往来社、二〇〇七年）。

（2）「八戸藩江戸勤番武士の日常生活と行動」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一三八、二〇〇七年）、「江戸勤番武士が見た「江戸」」（『同前』一四〇、二〇〇八年）、「庄内藩江戸勤番武士の行動と表象」（『同前』一五五、二〇一〇年）、「臼杵藩勤番武士の江戸における行動」（『同前』一九九、二〇一五年）、「江戸勤番武士がみた「江戸」と国元」（『歴史評論』七九〇、二〇一六年）などの一連の研究。

（3）岩城卓二「「御用」請負人と近世社会」（『国立歴史民俗博物館研究報告』四七、一九九三年）、久留島浩編『支配をささえる人々』（吉川弘文館、二〇〇〇年）など。

（4）森下徹『武家奉公人と労働社会』（山川出版社、二〇〇七年）。

（5）石黒衞「近世日本における「白鹿洞書院掲示」への視点」（『日本思想史研究会会報』一六、一九九八年）。

（6）一九世紀加賀藩「技術文化」研究会編『時代に挑んだ科学者たち―一九世紀加賀藩の科学技術―』（北國新聞社、二〇〇六年）。

（二〇一五年六月刊、名著出版、四八七頁、八五〇〇円＋税）